

万次郎人生の概観③

「フランクリン号での捕鯨の航海」

※今回は、万次郎が19歳から22歳の頃のエピソードをまとめた。

(1)再び捕鯨の旅路へ

ジョン・ハウランド号の元乗組員であったアイラ・デービスがフランクリン号という捕鯨船の船長に抜擢された。デービスは、既知であったバートレットアカデミーを修了したばかりの万次郎に乗船を勧めた。捕鯨は日本近海でも行う予定であり、日本に帰国できるチャンスがあるかもしれない。また、今まで学んだ航海術を実際に生かすことができる。万次郎は、ホイットフィールド船長が捕鯨で留守中だったので、夫人にそのことを相談し、夫人はこれを理解し認めた。

こうして1846年5月16日、万次郎を乗せたフランクリン号は、ニューベッドフォードを出港した。

(2)大西洋からアフリカ喜望峰を抜け、インド洋→太平洋へ

万次郎を乗せたフランクリン号は、大西洋を南東に南下し、喜望峰、インド洋を経て、ソロモン諸島・グアム・フィリピン(マニラ)・琉球・小笠原諸島等の近海で捕鯨を行った。1847年10月14日再びグアムに寄港した後から、船長デービスの精神状態が不安定となり、精神に異常をきたすことになる。船員らは暴れるデービスを軟禁し、米国の領事館があるフィリピンマニラまで航行し、治療のためデービスを領事館に預けて再び捕鯨を続けた。

船長を決める船員の投票によって、エーキンが船長に万次郎が副船長に選出された(同数票であったため年長のエーキンが船長になった)。1848年1月19日新船長の率いるフランクリン号はマニラを出港した。

(3)フランクリン号はハワイ・ホノルルに寄港、寅右衛門との再会

その後、インド洋・大西洋経由でニューベッドフォードへ帰港

マニラから黒潮に乗ってハワイ・ホノルルまで航行している途中、日本近海で20～30隻のカツオ船と遭遇する。陸奥国仙台のカツオ船であることが分かり、パンを2個差し入れたが海上であり、それ以上の交流をすることができなかった。

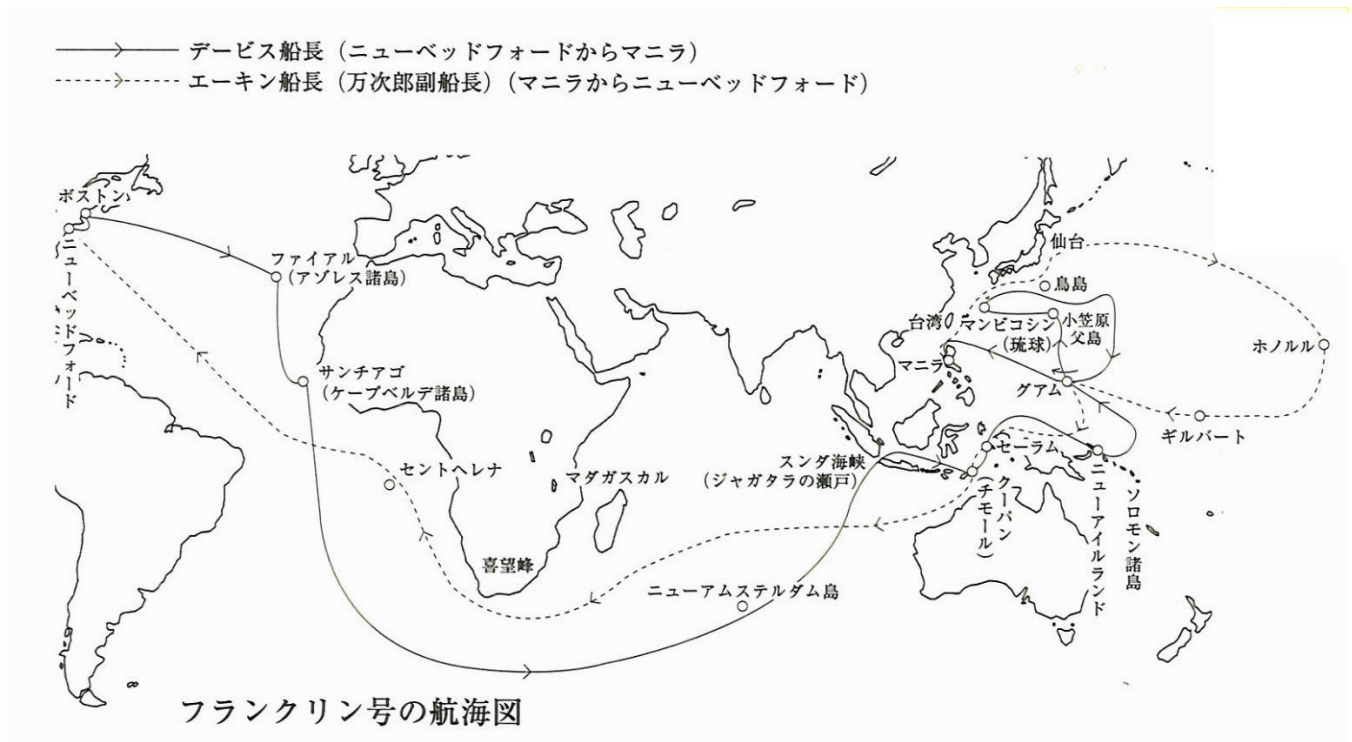
1848年10月17日、船はホノルルに寄港。伝蔵(筆之丞)と五右衛門はその頃、フロリダⅡ号に乗り帰国を試みていた。重助は既に亡くなっており(1846年1月末没)、このとき会えたのは、寅右衛門だけだった。寅右衛門は、最初は伝蔵や五右衛門と帰国を考えたが、結果的にハワイ・ホノルルに永住することを決めた。

ハワイに滞在していた万次郎のもとに、帰国したはずの伝蔵と五右衛門が戻ってきた(1848年10月28日)。上陸しようとした八丈島へ海流や波が高い関係で上陸できなかつ

た。北海道の松前では上陸はできたものの住民に恐れられてしまい、やむなくフロリダⅡ号に戻り、帰国は失敗し、ハワイ・ホノルルに戻ってきた。再会した万次郎、伝蔵、五右衛門は懐かしさ、うれしさでいっぱいだったことだろう。このときその後、友好を深めることになるデーモン牧師と初めて会った。彼はホイットフィールド船長と親しい間柄であった。

1848年11月3日、万次郎はフランクリン号に乗り、インド洋・大西洋を経て、母港ニューベッドフォードへ。1949年9月23日に帰港した。

次号では、万次郎が22～23歳の頃、カリフォルニア・サクラメントでの金採掘についてのエピソードを紹介したい。(28号へ続く)



↑中浜博『中濱万次郎—「アメリカ」を初めて伝えた日本人—』富山房インターナショナルの53頁を引用転載、

(参考文献)

- ・中浜博『中濱万次郎—「アメリカ」を初めて伝えた日本人—』富山房インターナショナル、2005年。
- ・川澄哲夫『中濱万次郎集成』小学館、1990年。

【編集後記】

8月2日(水)午後から「土佐清水市教研・社会科部会」が土佐清水市教育センターで開催され、「中濱万次郎」についての講話を依頼されている。対象は、社会科部会に所属している小中学校の先生方と清水高校の先生方16名くらいと聞いている。恐らく1時間弱の講話時間だと思う。1時間で万次郎を語るのは無理がある。

受講する先生方には、ゼミ方式の講話を行い、万次郎学習を深めていただきたいと考えている。万次郎と自分の生き方をオーバーレイしながら、その生き方をしっかりと見つめていける時間をつくっていききたい。(田村)